



監督＝マイケル・ホフマン／出演＝ケビン・クライン／エミール・ハーシュ／ジョエル・グレッッチ（東宝、東宝東和配給／2002年アメリカ映画／109分）

主人公は、名門聖ベネディクト校のギリシャ・ローマ史を教える名物教師。ジュリアス・シーザー・コンテストは、ギリシャ・ローマ史の知識を競う栄誉あるコンテスト。この規律正しい全寮制の学校の生徒と教師の前に現れたのは、上院議員の息子の転校生。彼の登場により、さまざまなハプニングが……。そしてその25年後には再び彼の手によってジュリアス・シーザー・コンテストのリメイク版が……。教育とはホントに難しいもの。そして教師という職業は、何度も「卒業の朝」を迎えることが必要なのかも……。

## 🎬 舞台は名門校、聖ベネディクト校

アメリカの聖ベネディクト校は全寮制の男子校。そして、映画から詳細はわからないが、1クラス30名程度の「少数精鋭主義」のようだ。パンフレットによれば、原作はイーサン・ケイニンの『宮殿泥棒』。この作品は、現在、作家活動を続けながら教鞭をとるケイニンが、少年の頃に出会い、強い影響を受けたという歴史教師を主人公にした、いわば回顧録ともいえる短編小説とのことだ。その教鞭をとる教師は、大学の受験科目とはおよそ関係のない、ギリシャ・ローマ史を教える名物教師ウィリアム・ハンダート（ケビン・クライン）。

## 🎬 ジュリアス・シーザー・コンテストとは？

このハンダートの指導の下に、聖ベネディクト校で毎年開催されるのがジュリ

アス・シーザー・コンテスト。これは、古代ギリシャ・ローマ時代の歴史、哲学、文学、戦争、その他あらゆるものを学び、その知識を深めた者がその知識を競うコンテストだ。具体的には、全生徒の中から最も優秀な3人の生徒が選抜され、その3名が大会の席において、古代ローマ帝国時代の衣装「トーガ」を身にまとい、ハンダートが発する質問に順次答えていき、最後まで正解を続けた者が優勝者として、ジュリアス・シーザーの称号と月桂冠の栄誉が与えられるというコンテスト。このコンテストで優勝するためには、膨大な勉強量に裏付けられた知識と記憶力が必要。そして今年も、そのジュリアス・シーザー・コンテストが開催されようとしていた。

## 問題児の出現

ある日、1人の転校生が教室に現れた。彼の名はベル（エミール・ハーシュ）。上院議員の息子だ。聖ベネディクト校のハンダートの教え子たちは皆、礼儀正しく、真面目で従順。そして全寮制システムの中で規律正しい生活を送っていた。しかしベルは……。

転校してきた最初の授業から、いきなり、天衣無縫というか、ワガママというか、言いたい放題というか、およそ教師に対する尊敬とか従順さという感覚をもたない困ったタイプ。決して頭は悪くないが、要するに「問題児」なのだ。寮の中でも、ベルは1人部屋の壁にボールを投げてのキャッチボール。静かに勉強している級友たちはこれに文句をつけるが、それを無視されると、それ以上はどうも……。逆に、ベルは級友たちにヌード写真の載った雑誌を見せたり、隣の女子校に誘ったり、校則無視のちょっとヤバイ行動に友人を引っ張り込む始末。こういう、ちょっと「ワル」だが、頭が良くてリーダーシップがあり、皆の人気者というタイプの子はどこにでも1人はいるものだ。

しかし、女子校の女の子たちと一緒に裸で泳ごうとしていたところがバレてしまったから、これは大変。ベルは、ハンダートから「アリストファネスはこう言った。“未熟なものは成長し、無知な者は学び、酔いは醒める。だが、愚かな者は永遠に愚かである”」と言い放たれた。

## 変われば変わるものだが……

この日を境にベルの態度は急変した。すなわち優等生への変身だ。メキメキと力をつけたベルはジュリアス・シーザー・コンテストを目指したが、ハンダートの採点では3位とわずか1点差の4位。これではコンテストの出場はムリ。ところが、あろうことか！ 公平で厳格な教師であるはずのハンダートは、悩んだあげく、3位と4位を入れ替え、ベルをコンテストに出場させた。しかし、この栄えあるコンテストでのベルの回答の様子がどことなくおかしい。両親や全校生徒が見守る中でのコンテストだから、そのインチキを見破る者はいなかったが、ただ1人出題者のハンダートだけは、ベルの「カンニング」を見破ったのだった。ハンダートはこれを公表しなかったものの、その心は傷つき、ベルもまたこの日以降再び劣等生の中に埋もれていった。教育とは本当に難しいものだ。

## 25年後のリマッチ

それから25年後。ハンダートは今、ベルの招待を受けて、ジュリアス・シーザー・コンテストの「リマッチ」のためのパーティー会場にいた。父親のコネで名門大学に進学し、今や大企業のトップとなった若き経営者ベル（ジョエル・グレッッチ）は、母校聖ベネディクト校への莫大な寄付を申し出た。しかしそれには条件が……。それは、同級生達を招くパーティーで、25年前のジュリアス・シーザー・コンテストの「リマッチ」を行うこと、そしてそのコンテストへのハンダートの出場だった。既に聖ベネディクト校を退職し、静かに余生を送っていたハンダートはこれを快く承諾し、いよいよジュリアス・シーザー・コンテストの「リマッチ」が始まった。

1人は脱落したものの、ベルともう1人の間でマッチレースが展開され、観客は正解の度に拍手喝采。しかし……またもやハンダートはベルのカンニングを見抜いてしまった。一体なぜなのだ？ ベルは何を考えているのか？ そこでハンダートが出した質問は、最初の授業で生徒達に読ませた銘板についての質問。これは授業を受けた生徒なら誰でも知っているはずの答えだが、カンニング用の本からは答えを出すことができない問題。そこで、あっさりと決着がついてしまっ

た。しかし、ベルはこの席において上院議員への立候補を表明。たちまち、このジュリアス・シーザー・コンテストは、ベルの立候補祝いのパーティーへと化してしまった。その後のトイレの中でのハンダートとベルの2人だけの会話。そして、これを隠れ聞いていたベルの息子。何とも気まずい状況となったが……。

## 最後に語られるハンダートの信念

ハンダートの心は明らかに再び傷ついていた。しかしハンダートの教育への信念は変わらない。それは、「何度つまずいても教師は望みを捨てない。教育には人を変える力があり、人の運命さえ変える」という信念だ。ハンダート自身が、ベルの行動によって深く心が傷つきながらも、自分の人生において、何度目かの、「卒業の朝」を迎えていた。

2004(平成16)年2月4日記

ミニコラム

### 私の中高生時代を考える

私の中学・高校は、愛媛県松山市にある中高6年一貫教育の男子だけの進学校である愛光学園。一流大学合格を目指すとともに、「愛と光の使徒たらんこと」を目指したカトリック校。全寮制ではないものの、県外から入学した生徒のほとんどは寮生活で、私のような自宅通学者以上に厳しい規律があった。この厳格な中高生時代、私には自由が抑圧されたというイメージが強く、あまりいい思い出はない。「恩師」といえる先生や「名物教師」もたしかにいた。しかし、私には、『卒業の朝』の聖ベネディクト校におけるベルと同じように、「授業を聞いても全然わからなかった」「ひどい赤点を取ってしまった」「予習をサボって怒られた」

「ズルをしていたのがバレて大恥をかけた」等のマイナスの思い出ばかりで、誇らしいと言える思い出はほとんどない。しかし、1967年3月の高校卒業から40年近くを経た今、①1987年の校報への寄稿、②1998年の同窓会本部での講演、そして③2002年の愛光学園創立50周年記念での寄稿や特集番組へのチョイ出演など、母校との接触が増えてきた。その結果、私の母校への思いも次第に変化し、恩返しができていたとの自覚も芽生えてきたようだ。中高校時代の数々の苦い体験を乗り越えてきたからこそ、今の自分があることを、この『卒業の朝』を観てあらためて痛感させられた1日だった。